

東洋医学の観方

高松 文三

大インフルエンザ

今から百年前、一九一四年の一大事件といえは、第一次世界大戦であるのは周知のことだが、それから四年後に起こった出来事については忘れ去られている感がある。全世界を巻き込み、その被害者（死者）数たるや大戦のそれをはるかに上回り、五千万人から、一説には一億人に及ぶと言われている。いわゆる「スペイン風邪」である。その規模は史上最大といつていい。実際に始まったのはアメリカ、カンザス州のハスケル郡という説が有力である。当初まだ大戦中、各国情報統制があり、中立国であったスペインではその必要がなく、いち早くインフルエンザの流行をニュースにしたために「スペイン風邪」と呼ばれるようになった。これによる一年間の犠牲者数は中世における黒死病（ペスト）の百年間に亘る犠牲者数を超えるというからその規模が想像できる。例えば、一九一八年十月の一カ月の間に、フランスのパリでは四五四人が犠牲となつてゐる。同月十日の一日の間に、フィラデルフィアでは、このインフルエンザによる死亡者が七五九人に及んだ。周りで人がバタバタと死んでいくという表現が大げさでも何でもない状況であつた。しかも、死ぬのは老人や子供だけでなく、二十代、三十代の若い人たちなのである。日本でも約一年の間に三十万人から四十万人が亡くなつてゐる。大戦を終わらせた一因にもなつてゐる。この大インフルエンザの猛威に敢然と立ち向かつた科学者達の物語「The Great Influenza by John M. Barry」によると、良くも悪しくもこのインフルエンザの研究は、その後のアメリカの医療のあり方を決定付けたと言つてよい。

まず驚くのは、一九〇〇年近くまではアメリカにはまともな医科大学が無かつたことだ。学費さえ払えば、ほぼ誰でも入れた。高卒の資格さえなくても入れたのだ。普通の大学に入るほうが困難だった

たのである。当時の医学の最先端を走つてゐたのはドイツやフランスであり、真摯に医学を志す者は多くそれらの国へ留学した。日本もアメリカと似たような状況にあり、北里柴三郎などはその代表的な一人である。当時において、北里は突出してゐて、当時彼を上回る医学者はアメリカにはいなかったと言つてよい。アメリカは医学においてはまだ後進国だったのである。ジョン・ホプキンス医科大学の設立（一八九三年）あたりからアメリカ医学は急速に進歩し始める。この物語はアメリカ医学史でもある。それから三十年を経ずして、ジョン・ホプキンス医科大学も、それと密接な関係にあつたロックフェラー・インスティテュートも医学研究機関としては世界でトップクラスになる。

インフルエンザの研究による副産物は数知れないが、その大きなものの一つはアレキサンダー・フレミングの抗生物質の発見である。ただ彼自身はあくまでも細菌培養の過程で偶然ペニシリンを発見しただけであつて、それを薬として使うアイデアはなかつたらしい。ほかにモズワルド・アペリーによる「DNAが遺伝因子である」という発見もある。しかしこの辺りから医療は「病人を治す」よりも「病気を治す」という傾向が強くなる。特定の病原菌が特定の病気を引き起こすという考え「Germs Theory」（微生物病原説）から、医療従事者のエネルギーは、病原菌の発見から、それに効く薬や、予防接種の生成などに注がれるようになる。医療がどんどん「Infection」になつていったのは当然の成り行きである。患者さん個人の身体を診るのではなくテスト結果というデータを見て治療を決めるというやり方はこの頃に芽生えた。ちなみにこの物語の後半に野口英世が登場するのが興味深い。彼は、インフルエンザの研究には直接貢献はしてゐないが、アメリカ医学の創成記にその渦中にあるロックフェラー・インスティテュートにいた。研究所初代、デレクターのサイモン・フレクスナーを頼つて渡米したわけである。彼の業績の評価は定まらないが、これを読む限りわりと周囲には愛されたらしい。

現在でも、インフルエンザの死亡者は毎年三万人を超えらるという。先頃ずいぶん取り沙汰されたエボラでさえも、約一

年で数千人の死亡者を出しているというから、どちらかと言えばむしろインフルエンザの方が、脅威である。確かに、エボラの方が一度罹つた場合の致死率は高い（五〇％以上）が、罹患率は麻疹（はいしか）よりも低く、なりよりもインフルエンザのように空気感染はしないので、その点は安心である。二十年前のベストセラー「Hot Zone by Richard P. Phillips」はエボラの恐ろしさを世に知らしめたが、この本にはだいたふ正確なところがあるという。確かにフィクションを読むような感覚で読めるが、脚色が多いようだ。はつきり言つて余り参考にはならなかつた。ただ、エイズにせよ、エボラにせよ、アフリカに生息する猿などを使う動物実験が、流行病の蔓延の一因になつてゐることを示唆してゐるところは注目し値する。

ともかくにも、ヒポクラテスの時代からほぼ二千年間ほとんど変化がなかつた西洋医学が、ここ百年余りに見せた劇的な進歩は目を見張るものがある。それは、科学の進歩と表裏一体となつてゐる。ただ科学であるためには再現性がその必要条件だが、その意味で、医学は未来永劫科学にはなり得ないことをわれわれは認識すべきである。医学が人間を対象とする限り、個性を無視しては成り立たない。いかに罹患率の高い流行病であるうとも、一〇〇％ということとはあり得ない。同じような条件でも、罹る人と罹らない人がゐる。一八九二年、コッホと並んで日本の医学界にただならぬ影響を与えたベッテンコフアーが、コッホとの論争にけりをつけるためにコッホが培養した多量のコレラ菌を飲んだ。コッホはコレラ菌こそがコレラの病因であることを主張する一方、ベッテンコフアーはコレラの原因はもつと複合的なものと主張した。事実コレラ菌を多量摂取したベッテンコフアーはコレラに罹らなかつた。これをもつてベッテンコフアーは、コッホが提唱する「Germ Theory」に異を唱えたはずだが、近代医学の大きな流れには逆らえなかつた。ここで学ぶべきは、医学には再現性がない、つまり科学にはなり得ないということだ。科学の世界は一足す一は必ず二の世界だが、人間というのは、一足す一が三になつたり、ゼロになつたりする世界なのだ。西洋医学の最大の武器は科学技術であるのは論を俟たないが、その最大盲点も医学は科学であるという妄想に他ならない。そして、大インフルエンザから百年経つた今も、まだ我々はその妄想から覚めてゐない。

東洋医学の観方

高松 文三

心主脳従

「日に新たに、日に日に新たに、また日に新たなれ」

殷の湯王は、洗面器に彫り付けたこの言葉を毎日読んで、自戒としたとある。つまり、一日として同じ日などなく、人間は死ぬまで日々進歩してゆくものだということ。しかしながら、脳の老化や、毎日確実に万単位で脳細胞を失つてゆくという現実はいかんともしがたい。心がけは立派だが、所詮こんな名句も夢物語と思われてきた。ところが、最近の脳科学の成果は別のことを言い出している。脳細胞にも、Neuroplasticity（神経細胞可塑性）というものがあリ、一度傷ついた脳でも元に戻る可能性は充分にあるらしい。脳細胞同士のネットワーク（シナプス）を増やすことで、死ぬまで成長するといふ。確かに毎百万単位の脳細胞を失うのだが、全体から見ると微々たるもので、機能的には何の支障もきたさない。要するに文字通り「日に新た」は可能なのだ。

「Super Brain」（Deepak Chopra, Rudolph E. Tanzi 共著）は、最新の脳科学を取り入れた、人生指南書である。その主旨は、「脳を使え、使われるな」ということに尽きる。ここで、発想の転換が必要になる。脳が心（意識）を生み出しているのなら、そんな芸当は出来ない。でも本当は逆なのだ。心（意識）が脳を生み出したのである。それを証明することは困難だが、逆に脳が意識を生み出していることを証明することも同様に困難である。著者は、重度の水頭症（脳室に異常に脳髄液が溜まる）で、ほぼ無脳状態にある人が正常に機能している例などを挙げて、心主脳従の一例としてゐる。「脳を使つ」コツは、「意識的」に生きることである。人間と他の動物との最大の違いは、意識的に生きれるかどうかである。野性の動物はおそらく一生無意識的に生きてゐる。その時その場の環境に反応して、反射的（本能的）に行動しているだけである。別の言い方をすれば、「思考」は意識的、「癖」は無意識的であ

と呼ぶのはさもあらん。

神経シナプスの研究でノーベル賞を取つた「Gottlieb Harlow」という神経生理学者がこんな言葉を残している。「知つて欲しいのは、この世には色もなく、音もなく、感触もなく、形もなく、美もなく、匂いもないといふことである。」目に見えるもの、耳に聞こえるもの、手で触れるもの、鼻で匂えるもの、ついでに言えば、舌で味わえるものまで、すべては脳により「存在する」と思い込まされてゐる」と言つてもいい。般若心経の中の「無眼耳鼻舌身意無色声香味触」の部分を読み起す人もゐることだろう。エックルズ先生が般若心経を知つてゐたのかどうかは定かではないが、仏教徒にとつてみれば、先生の言ふことは別に目新しいことではない。科学と宗教が接近することを思わせる好例である。

脳の話が出ると必ずと言つていいほど引き合いに出される人物が、アインシュタインである。この著書にも彼が何度も登場する。アインシュタインの脳は平均より一〇％軽かつたさうである。引用句が多く中でも印象に残つたのは次の言葉だ。「もつとも不思議なことは、宇宙が存在するといふことではない。その存在を認識できる人間の意識である」アインシュタインに限らず、物理学者には哲学者のようなことを言つた人が他にもゐる。シュレディンガーもその一人。「究極的には、宇宙に存在するのは唯一一つの意識だけである」彼もまた、人智を超えた何かを垣間見たのに違ひない。

意識を上げ、脳を支配下に置くことで、無限の可能性が見えてくるという。では、どうやつて意識を上げればよいのか。

- 無意識の行動、言動をなるべく少なくすること。目覚め、気づき、注意などを重視する。
 - なるべく他人と同じように考えたり、行動したりしない。
 - 他人の評価を気にしないこと。評価は自分で下す。他人に認められることを求めず、ただ他を利用することに励め。
 - 努めて、高尚な芸術、詩、音楽に触れよ。
 - 一つの宗教にこだわることをなく、世界中の聖なる書を読むこと。
 - 自分の「思い込み」を疑つてみる。
 - エゴを少なくせよ。「私」の限界を超える努力をせよ。
 - 人生がもたらす最高の意味を追求せよ。
 - 自己成長には限りのないことを信じよ。
 - 心の道程を希望を持つて誠実に歩め。
- これらのことを心がけることで、人は「また日に新た」に成長を遂げるのである。